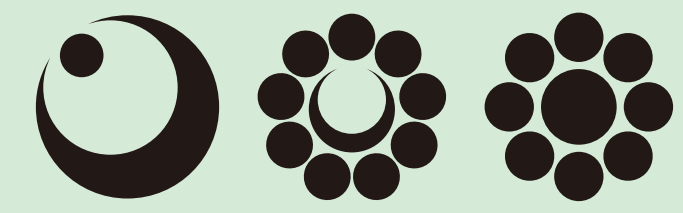


千葉氏ゆかりの地


お茶の水
 Ochanomizu

千葉市中央区亥鼻1丁目



千葉氏ポータルサイト Foreign Languages

この場所は「お茶の水」と呼ばれています。もともと湧水があり、泉の側には不動明王が祀られていることから、「不動の泉」という呼び名もあります。湧水はかなり前に枯れてしまいましたが、ここが「お茶の水」と呼ばれるようになった由来として、その名にちなんだ二つの伝説が伝えられています。

一つ目は、源頼朝にまつわる伝説です。源頼朝は治承4年(1180)相模国石橋山(神奈川県小田原市)の合戦で敗れた後、舟で安房国にわたり、千葉氏を始めとする房総の武士団に支えられて勢力を盛り返し鎌倉に入りました。その道中、千葉常胤の本拠地に足を止めた源頼朝に、この水でたてたお茶を差し上げたというものです。平安時代初期には国内でお茶の栽培が始まっていますが、まだ一般に普及していなかったため、後の時代に作られた話の可能性もあります。

二つ目は徳川家康にまつわる伝説です。慶長19年(1614)、徳川家康が東金方面へ鷹狩りに向かう途中で千葉に泊まり、この水でたてたお茶を飲んだというものです。それから60年後の延宝2年(1674)にこの地を訪れた徳川光圀(家康の孫、水戸黄門として知られる)も「古城の山根に水あり、『東照宮(徳川家康の神号)お茶の水』と伝う。右の方松の森あり、『東照宮御旅館の跡なり』と云う。」と書き残しています。

この湧き水は台地上の城を守る人には大事な水源であり、また街道をいく人や馬にとって喉を潤す場所でもありました。

江戸時代の関東地方では広く不動尊に対する信仰が庶民に広まり、人にとって大切な水を守る水神信仰と結びつきました。不動尊信仰の場として、千葉県では成田山新勝寺(成田市)がよく知られていますが、ここに不動明王が祀られているのは、その大切な水を守るという考えからだといわれています。



浜田勝己「御茶之水図」

千葉常胤(奥の人物)が源頼朝(手前の人物)にお茶を献上する様子を描いたもの